

国立教育政策研究所第27回研究公開シンポジウム

「学士課程教育の構成と体系化」 参加報告

寺西 宏友

1. シンポジウム概要

- ① 日時： 2008年8月30日（土） 13:30～17:30
- ② 会場： 文部科学省講堂
- ③ プログラム
主催者挨拶 近藤信司（国立教育政策研究所所長）
基調報告 久保公人（文部科学省大臣官房審議官）
特別講演 「大学の教育力—変革の可能性—」
金子元久（東京大学大学院教育学研究科長）
パネルディスカッション「学士課程教育をどう具体化するか」
「初年次教育の広がり」と学士課程教育」
川島啓二（国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官）
「カリキュラム改革と学習目標の明示—ICUの事例から—」
日比谷潤子（ICU学務副学長）
「学士課程における学習成果のアセスメント」
川嶋太津夫（神戸大学大学教育推進機構教授）

2. 内容総括

- ・中央教育審議会大学分科会の「学士課程教育の構築にむけて」で、取り上げられた、

- ① 学士課程充実のための取り組み
 - i) ディプロマポリシー
 - ii) カリキュラムポリシー
 - iii) アドミッションポリシー
- ② 学士課程教育の充実を支える体制作り
 - i) FD活動の促進
 - ii) 質保証システムの整備確立

をめぐってのシンポジウム。

- ・特に金子講演では、現在大学教育が直面している変動を「量から質への変化」ととらえ、東京大学大学経営政策研究センター（CRUMP）が実施をしたアンケート調査の結果を

もとに分析。(全国120大学・4万8千人を調査)

- ・この講演の中で、特筆すべきは、学士課程の構成・体系を i) **専門中核学力** (学部等の教育単位ごとに検討されるべきもの) ii) **基礎能力** (意欲・論理性・コミュニケーション能力) iii) 視野拡大と動機付けと説明したことで、特に「**専門中核学力**」という言葉に、今後の変革のポイントがあると主張していた。
- ・また、社会人基礎力という言葉で、社会が求めている、いわゆる「基礎能力」の重要性は、アンケートの中で、学生自身も認識しており、大学として本気で取り組むべき課題であるとしながら、そのことのために特別な授業科目の設置をするということには、否定的で、大学が提供するすべての通常の授業で、意識し目指されるべきであるとしていた。
- ・巷間言われているような学問領域ごとのスタンダード化された達成度測定テストのようなものの導入に対しては、今大学教育が直面している教育の質を高めるために何をなすべきかという根本的な問いかけをふさいでしまうネガティブな影響を憂慮するとしていた。すなわち、そうした客観テストのようなものを導入し、その結果によって、各大学の教育パフォーマンスを測るということになると、勢い、大学の授業の多くが受験対策に走りかねないことを指摘。
- ・アウトカム重視の大学教育の変革を主張した川嶋報告(「学士課程における学習成果のアセスメント」)では、達成度測定テストでも、その学問領域の内容をしっかりと把握する良質のテストが出来るのであれば、否定すべきものでもないとの見解が示された。

3. 本学の今後にかすべき諸点

- ・ICUのカリキュラム改革の報告の中で、教員組織の改革について説明があった。それまでの6学科を16の部門に編成し直し、各部門6~10名の教員で原則2つの専修テーマ(メジャー)、合計31のメジャーを提供。この際に、各メジャーごとに、徹底した到達目標に関する議論を深めた。こうした、事例を参考に、本学でも各学部ごとのラーニングアウトカムに関する議論を深めていくと同時に、もう少し、小さい単位(Ex. 文学部の専修、経済・法学のコース担当)でも、同様の議論を進めることは考えられる。
- ・金子講演の中で、教員個々の「何を教えるか」から、「学生に何を学ばせ何を得させるか」への授業プラクティスの上での発想の転換が重要とあったが、「教育の質保証」という抜

本的な問題提起の最終的なキーポイントは、ここに尽きるという感を得た。

- 金子氏は、こうした大学教育の「量から質」への変化に関し、「量」の拡大が現在の問題を引き起こしていることは間違いないが、この「量」の拡大も50年近い歴史の中での変化であることを指摘し、いま直面する「質」の問題を乗り越えるプロセスも、それぐらいの歴史が必要となるかも知れないとの認識の必要性を強調。今大事なのは、「質保証」の成果を性急に求めることよりも、変革のプロセスを確かにする体制を確立すること。この点を踏まえて、本学でも現在のグランドデザイン検討の流れと合わせて、本学の教育の質を検討・検証する体制を明確化する必要性を感じた。